

「主イエスは天にあげられた」

ホセア書
マルコによる福音書

第6章 1節～3節
第16章 9節～20節

説教 岡村 恒牧師

「主イエスは彼らに語り終ってから、天にあげられ、神の右にすわられた。」(19節)使徒信条にもあるこの信仰を、私たちは世界中のキリスト者と共に告白しています。主イエスが復活の後、天に昇られて神の右の座につかれたことは、私たちの希望を支える根拠です。

マルコによる福音書は、「神の子、イエス・キリストの福音のはじめ」(1章節)と語り始め、しめくりに、主イエスの昇天を記します。9節から20節の部分は、古い写本には記されていない部分です。しかしキリスト教会は、この部分もまた、神の言葉そのものであるとして読み伝えてきました。この部分が、私たちの教会の姿を描き出しながら、確かな希望を指さしているからです。

ご復活された主イエスのことを聞いても、「信じなかった」(11節、13節)弟子たちが何人もいました。婦人たちの証言や、エマオから帰ってきた二人の弟子たちの証言を聞いても、主イエスとずっと一緒に歩いて来た弟子たちは、「信じなかった」のです。どうしても信じることができない者、これが私たちの姿なのです。初代教会の指導者たちの「信じなかった」という告白は、主イエスのご復活と救いの約束が、神の御業、奇跡であることを明らかにしています。

やがて弟子たちに聖霊が降った時、弟子たちは初めて主イエスを信じて、主の復活を人々に語り伝えることができるようになりました。どうしても信じることができない私たちのために、主イエスは助け主なる聖霊を送ると約束し、その通りに聖霊を注いで下さったのです。

この日、不信仰でかたくなな弟子たちを、主イエスは「お責めになった(14節)」と聖書は記します。とても不思議なことに、この言葉は、主イエスの両側で十字架に架けられた罪人たちが「主イエスをののしった」という時の「ののしった」という言葉と同じです(ルカによる福音書23章39節～43節)。主イエスは、弟子たちの不信仰をののしったのでしょうか。もしそうなら、つまり私たちが、どんな時にも揺らぐことのない確かな信仰を持たねばならないとしたら、私たちには何一つ希望がありません。

聖書は、主イエスの言葉を記しながら、「不信仰な者の救い」を伝えます。どうしても自分の知識や判断に頼り、神に信頼しきることができない私たちを、神はとがめたりののしったりし

ないのです。むしろ、主イエスがあの十字架の上で、苦しみの中で祈られた姿を伝えます。「父よ、彼らをお赦し下さい。彼らは何をしているのか分からないでいるのです」(ルカによる福音書23章34節)。また、主イエスを裏切ってしまうペテロのために、「わたしはあなたの信仰がなくならないように祈った」(ルカによる福音書22章32節)とあらかじめおっしゃいました。信仰を持つことにも、持ち続けることにも失敗する私たちを、主イエスはよくご存知でした。

やがて主イエスの使徒パウロは、私たちを神の愛から引き離すものはない、と大胆に宣言しました(ローマ人への手紙8章34節～39節)。主イエスは、私たちを神から引き離そうとする私たち自身の不信仰をののしって、私たちにお命じになります。「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」(15節)この宣教命令は、私たちを神の手の中において、豊かな可能性の中に入れてしまう招きの言葉です。不可能を可能にして下さるお方、その口にした言葉が全て、例外なく事実となるお方が、私たちに命じてくださるのです。私たちに必要な力を与えて、神の命令が実現していく、そのみ業のただ中に私たちを置いて下さるのです。

主イエスは、天において私たちのために場所を用意して、再び来て下さるために昇っていかれました。これが、主イエスの約束です。(ヨハネによる福音書14章1節～3節)さらに主イエスは、私たちの弱さを思いやることのできるお方です。(ヘブル人への手紙4章14節～15節)私たちの痛みや悲しみを誰よりも知っておられ、ご自身の霊を送って、共に歩んで下さいます。

私たちといつまでも共にいて下さるお方が、今、神の右の座におられます。ここに、私たちの希望の根拠があります。主イエスの執り成し無しには、悔い改めも信仰告白も起こらないのです。主イエスが、「場所を用意」しに行って下さった以上、私たちの場所は確実に用意され、やがてそこに迎え入れられることは確実です。

主イエスは死人の中から復活して、今も生きておられます。私たちをとりなし、支え続けておられます。ここに私たちの唯一の希望があります。私たちはこの希望に立って、福音を宣べ伝えます。主イエスは、この私たちと共に働いて下さいます。

(記 岡村 恒)